

第四百九回 青葉会

令和二年五月二十八日(木) 投句 三十日(土) 選句 によるウエブ句会

〈選者〉 ◎川口孤舟

投句・選句

伊賀山そらお 今井紀久男 柿崎忠彦 川口孤舟 久米五郎太 小西弘子
小早健介 在間千恵 佐藤ただしげ 朱牟田恵洲 土谷堂哉 豊田ゆたか
福島正明 古田昇 星田啓子 宮内規雄 山崎亜也 山田けい子 山内天牛
渡邊盛雄
安部眞希子 重枝孝岳 庄司龍平 高橋敏郎 橋口隆 長谷見敏(びん)
早川充章 松崎浩 村田くに子 山本三恵

〈選句のみ〉

《互選句》 ◎は孤舟選者の選

十点 ◎子供等の頭が囲む青蛙

ブラ下がる子無き鉄棒百日紅

弘子 (そ・紀・孤・健・恵・堂・○充・啓・浩・け)
正明 (そ・弘・健・た・龍・ゆ・浩・く・○天・盛)

九点 ◎新茶汲む二人の歩み知る湯飲み

甚平着て風の機嫌を聴いてをり
友逝く日香り重たし蜜柑花

健介 (○眞・そ・孤・○忠・孝・敏・○堂・昇・規)
孤舟 (恵・○昇・び・正・○啓・け・三)
啓子 (○そ・紀・忠・五・浩・○敏・三)

六点

山菜の苦味楽しむ立夏かな
結ひ上げし女将のうなじ水を打つ

忠彦 (そ・紀・千・た・敏・ゆ)
孤舟 (紀・健・た・敏・堂・充)
恵洲 (眞・孤・弘・び・○正・浩)

◎恙無き日々を大事に新茶汲む

ひっそりと真白の衣やまぼうし
てんと虫葉裏にそつと憩いけり

昇 (そ・紀・孤・弘・び・○規)
啓子 (紀・忠・五・孝・敏・堂)
規雄 (健・○千・た・敏・ゆ・浩)

五点

◎陽の光草木に宿る五月かな

◎緑さす堀端に建つ新社屋

籠る日々そしらぬ顔の蟻動く

孤舟 (五・○ゆ・充・啓・け)
忠彦 (紀・孤・孝・び・啓)
昇 (忠・孤・○弘・正・規)
盛雄 (眞・隆・啓・○浩・○け)

四点

薫風や古き寺まで足伸ばし
ふたり連れ斜めに座る五月かな

◎積み置きし本読めぬまま四月尽

何時の間に日蔭を歩む薄暑かな
罌粟の花日毎に盛る売地かな

千恵 (孤・隆・充・亜)
堂哉 (五・千・孝・充)
堂哉 (眞・紀・び・○亜)
規雄 (紀・○恵・堂・隆)

しばらくは一人静を友として
魔除けにと新タマネギを今日も又

けい子 (紀・龍・隆・亜)

三点

◎紅色の上枝(ほつえ)に揺るる栃の花

いかづちや休校疲れを我慢の子
藤の花風に揺れ浮かぶ大津絵

孤舟 (恵・規・く)
五郎太 (紀・孤・ゆ)
健介 (眞・紀・天)
ただしげ (紀・○五・盛)

誇るものひとつ水虫なき足裏(あうら)
年来の鉢打ち壊し根分けかな

◎雨催いトトロの森で郭公鳴く

意志ありて群れ立つ藪やさみどりに
大皿に山女大きく眼も口も

恵洲 (健・昇・規)
堂哉 (五・○健・亜)
ゆたか (そ・紀・盛)
正明 (紀・孤・昇)
亜也 (紀・孝・龍)

ペン持つ手庖丁を持ち夏に入る
◎寿の幟の文字(もんじ)ふくらめり

けい子 (堂・ゆ・く)
天牛 (○紀・隆・○盛)
天牛 (孤・孝・三)

万緑や疲れいささか万歩計

盛雄 (紀・恵・天)

二点

太古より変わらぬ疾さごきかぶり
携帯で英字紙読むや風青し
緑なす茶の湯教本色褪せる
朔日の慣ひの読経夏来る
巢ごもりのつれづれ壺に額の花
会いたくも友も巢ごもり五月晴
薫風や伸び放だいの髪を茹る

孤舟 (恵・亜)
五郎太 (紀・正)
五郎太 (紀・正)
堂哉 (弘・盛)
ゆたか (紀・昇)
ゆたか (千・〇た)
天牛 (〇龍・く)

一点

初つばめ地を這う如く飛び去りぬ
用済ませぶらぶら歩く初夏の町
籠り居の吾をおちよくるやほととぎす
ちぬ捌く妻を介護の句友かな
夏鶯自肅疲れを癒してくれ
新スマホまず孫の声を子供の日
帰宅して手洗ふ習慣草茂る
さあ授業オンラインでの風薫る
惜春や古都の輝いま何処
ミニトマト庭で小つちやな花をつけ
連休はステイホームで草むしり
庭先に菜園つくり夏野菜
日本全国晴れの予報や風薫る
大きマスクして夏場所のない力士
母の日の祝いたき母遺影かな
鶉を待み鮎獲る漁や神供え
家に居り日毎濃さます若葉かな
孫の鯉尻我が家の上泳ぐ
桑の実や孫八才の誕生日
猫二匹鳴き声ひとつ五月闇

そらお (た)
そらお (紀)
紀久男 (規)
全 (忠)
全 (忠)
忠彦 (紀)
全 (眞)
全 (紀)
千恵 (紀)
ただしげ (天)
全 (紀)
全 (隆)
恵洲 (く)
恵洲 (天)
堂哉 (紀)
啓子 (紀)
けい子 (千)
天牛 (け)
天牛 (龍)
盛雄 (昇)

《句評》

十点句 「子供等の頭が囲む青蛙」

① 紀久男・中七の表現「頭」が上手い。これが蛇なら囲まず遠巻きにして敬遠するか、棒切れで痛めつけるか、どちらかになります。

「ブラ下がる子無き鉄棒百日紅」

① 天牛さん・がらんとした遊び場に咲く百日紅がきいています。いい句ですね。

九点句 「新茶汲む二人の歩み知る湯飲み」

① 眞希子さん・祖父父母、両親を私の目に夫婦として意識させたのが夫婦（めおと）の湯飲み。もう若くない夫婦が黙ってお茶を飲んでいる。二人の世界、二人の来し方、割って入るのは無粋。「今日から新茶」と祖母の華やいだ声。夫はどちらも無口。でもこの時ばかりは笑顔。深く頷く懐かしい昭和の我が家。
② 忠彦さん・湯飲みに夫婦の人生を語らせた味のある句と思えました。

七点句 「甚平着て風の機嫌を聴いてをり」

① 正明さん・「風の機嫌を聴いている」この表現が上手い。
② 昇さん・風にも色んな表情や情報があります。自宅籠城下、甚平姿で自若として
コロナ終息の風の朗報を心待ちにしているような余裕が良いですね。
「友逝く日香り重たし蜜柑花」
① 敏郎さん・「香り重たし」が印象的です。

六点句 「てんと虫葉裏にそつと憩いけり」

① 千恵さん・小さい命に向けられた愛情を感じます。やさしい気持ちになります。

「初夏の旅水掛け不動に待合はず」

① 川崎雅子「きさらぎ」 選者・法善寺横丁の水掛け不動さんのことでしょうか。旅のはじめに取り敢えず美味しいものを食べるのもいいですね。「初夏の旅」も効いています。

五点句 「緑さす堀端に建つ新社屋」

① 弘子さん・いよいよ丸紅の新社屋が建ちあがりました・新緑に映えて素晴らしい

その眺めを誇らしい思いで見えておられる気持ち伝わります。

「籠る日々そしらぬ顔の蟻動く」

① けい子さん・コロナの日々「そしらぬ顔」がおもしろく、のんびり吉報を待つ風情が感じられます。

② 隆さん・・・《連想》「巣ごもりを横目に見るや蟻の道」

四点句 「罌粟の花日毎に盛る売地かな」

① 亜也さん・拙宅の近所でも見かける景。日々の「変化を捉えた観察眼に敬意を表します。

表します。

「魔除けにと新タマネギを今日も又」

① 隆さん・下五↓「今日も買ふ」ではいかがでしょう。

「ふたり連れ斜めに座る五月かな」

① 亜也さん・自作も含めいささか食傷する感のあるコロナ絡みの句の中で、さりげなさに好感を持ちました。

三点句 「年来の鉢打ち壊し根分けかな」

① 健介さん・根分けした経験ないですが、「年来」の鉢を壊すのはインパクトがあります。

② 紀久男・・・「根分け」は春の季語です。

「藤の花風に揺れ浮かぶ大津絵」

① 五郎太さん・藤棚に風が吹き、垂れた花が可憐に、まるでしなだれかかるように揺れる。藤は松にしがみつくど強く締める。若い娘か有馬の遊女か。長唄になり、舞踊になった

つややかな大津絵の藤娘の姿が浮かぶ。

「ペン持つ手庖丁を持ち夏に入る」

① 紀久男・・・毎朝、ライフワークの「プルタルク」の翻訳をされこのほど完了されましたが、奥様が胸椎腰椎を骨折され寝たきりに。92歳で初めて厨房に入って色々な料理

を作られるようになり、奥様に褒められる程腕を上げられた由。

愛用の万年筆を料理の庖丁に持ち替えての奮闘ぶりにエールを送りたいと思います。

二点句 「会いたくも友も巣ごもり五月晴」

① ただしげさん・家に籠る日々の気持ちがよく表れていて共感できる。

「薫風や伸び放だいの髪を茹る」

① 龍平さん・私も永く理髪に行けず堪らず家居中へセルフカットにチャレンジした。《連想》↓「家居長セルフカットし夏に入る」

* * * * *

●次回青葉会

六月二十五日(木) 午後一時半から五時 文京区民センター会議室

▲当季雑詠五句 投句二句

令和二年 六月七日

文責 紀久男

令和二年六月 青葉会報

一、孤舟選者の作品が5月20日毎日新聞、坪内稔典のコラム「季語刻々」に引用掲載されました。

「夢見るに程よき高さハンモック」川口 襄

世情が安定したら、たとえば次のようなことをしたい。海辺で水平線を眺める。動物園のカバ舎の前に腰をおろしてあんパンを食べる。お寺の大きな縁側でちよつと昼寝する。俳句仲間の若い看護師にイタリア料理をおごる。ハンモックのある観光施設を探して一人旅をする。今日の句、句集「星空」から、作者は埼玉県川越市に住む。

二、盛雄さんの毎日新聞・兵庫文芸・若森京子選・入選作を紹介

・シルクロードの果ては淡路の野水仙

・花桐や万葉文化今に生く

・消し切れぬ歴史の汚れサルビア燃ゆ（沖縄戦禍）

・ボール蹴る少女の動き夏の蝶

・兜子忌や今に不明の青き闇（兜子とは赤尾兜子を指します）

・原発の陰にひっそり土筆伸ぶ

三、恵洲さんの俳諧味溢れる連句と粹な都々逸は高名です。学生時代からの連句のお仲間

「鹿吟舎」発足四十周年記念に「鹿柴」を上梓され（平成三十年十二月発行。850頁）

ご惠贈に与りました。

相当読み応えあります。連衆の池央耿（いけひろあき）さんのドビュツシーについての論考は大いに愉しませて貰いました。連句界の大御所でした丸谷才一もゲストに招ばれております。

四、関係者近詠

競はされ花展に崩る寒椿

眞希子

電線に結ばれ家並冬樺

全

陽に眠り香りに狂ふ春の蠅

全

白銀の爪ふつくらと辛夷の芽

弘子

バリカンの五分刈り一気麦の春

全

こぼれては小米のやうに枝垂梅

全

春の鷹放し秩父は山の国

全

ゆさゆさと春の星押す観覧車

全

いつもとは違ふゆるさの寒明くる

陽亮

春立ちぬ神の御稜威（みいつ）の御前に

全

ドミンゴも斯くやの初音渡り来る

全

妻の耳おとろふ斯程の初音聞かず

全

春の川海と馴れ合ひ海になる

全

――「森の座」五月号

独り酌む涼しき風を入れながら

充章

一丁を半分づつに冷奴

全

畦川の煌めき跳る五月かな

全

鬼貫の歩みしあたり余花に会ふ

盛雄

緑蔭や孤独は最期だけでいい

健介

うぐひすを妻と聞きおり庭青々

雅夫

裏山にうぐひす高く声澄めり

全

青に染まる通天閣の夏夕べ

紀久男

常温良し冷酒（ひゃ）はなほ佳き「老松」てふ

全

令和二年六月七日

紀久男 記